カトリック仙台教区報

2013年5月5日　No.211
発　行
カトリック仙台司教区
〒980-0014
仙台市青葉区本町 1-2-12
Tel(022)222-7371 Fax(022)222-7378
発行責任　広報委員会
URL http://sendai.catholic.jp/

教皇フランシスコ就任

第266代教皇フランシスコ（76歳・イエズス会）は、南米アルゼンチン出身。1300年ぶりにヨーロッパ以外から選出された。また、イエズス会からも初めてのこと。素朴で信念を持った人柄は、教会に新しい息吹をもたらしてくれるとの期待も大きい。アルゼンチン出身のシルビア・プチェッタさんと、アルゼンチンから最近帰国した五十嵐晃さんから喜びの声が寄せられた。

シルビア・プチェッタ（元寺小路教会）

最初に感じたことはまず驚きでした。驚きから大きい喜びと興奮に変わりました。

私たちの喜びは、新教皇がラテンアメリカの人であり、それがラテンアメリカの人たちの心からの希望でもあったからです。

私の国の多くの人たちは教皇の選挙をテレビで見て、決まった瞬間泣きだす人もいて、人々に与えたインパクトの大きさは想像を絶します。

ブエノスアイレスのカテドラルの周りには多くの人たちが集まり、アルゼンチンの国旗を振りかざしていました。

「大声で叫びたいほどの興奮を感じる、これは神からの祝福だ」。「ラテンアメリカの教会の重要さが現実として示された。誇りを感じて興奮している」。「ラテンアメリカの人たちにとって良いことだ、新たな出発だ」。85歳の男性は、「カトリック教徒としてアルゼンチン人として、この偉大な瞬間を見るまでの長寿を与えてくれた神に感謝する」。「これはラテンアメリカのすべての人たちにとって、とてつもなく大きな贈り物だ、私たちは2000年待ち続けたが、待つだけの価値があった」と、人々は喜びの声をあげている。

私は新教皇の誕生をうれしく思いますが、それは彼がアルゼンチン人であるということだけでなく、彼が伝えようとしている「貧しい人たちのための貧しい教会になりたい」というメッセージにあります。

教皇フランシスコはすべての人たちにつながっていることを堅く信じます。

彼は多くの人たちの前でお辞儀をし、沈黙のうちに私のために祈ってくださいと伝えました。

教皇フランシスコのために、教会のすべての人たちのために、神の愛を必要なところに届けることができるように祈りたいと思います。

五十嵐晃（一本杉教会）

私たちの新たなパパ、教皇フランシスコの就任を心よりお祝い申し上げます。

私は2004年から9年間をアルゼンチンのブエノスアイレスで過ごしました。

アルゼンチン出身の教皇ということで、ブエノスアイレスに暮らしていた自分にとっては、感慨深いものがあります。もちろん直接お会いしたことはありませんが、庶民派の枢機卿であったということ、あのお世辞にもきれいとは言えないブエノスアイレスの地下鉄や路線バスを使われていたらしく、街のどこかで自分とすれ違っていたのかもしれないと思うと、不思議な親近感みたいなものがわいてきます。

国民の90％以上がカトリックであり、街の至る所に教会があり、そして人々は信心深いです。地下鉄の駅構内にある聖母マリアの祭られた壁絵に、何人もの人がキスをして通り過ぎます。

貧富の差が激しく、かつての栄光を失い、お世辞にも豊かな国とは言えないアルゼンチンですが、そこには何かゆるやかさみたいなものを感じます。それは教会というコミュニティを通して人々をつなぐ神の愛なのかもしれません。

去年の復活祭の日、聖イグナシオ・デ・ロヨラ教会にて私は洗礼を受けました。その時私は、おおらかなアルゼンチンの人たちと一緒に生きていく決心をしました。

ベルゴリオ枢機卿あらため教皇フランシスコも他宗教に理解のある素晴らしいお方です。そのもとに世界が愛でひとつになることを心より祈ります。神の祝福が新教皇にありますように。

生命の泉

春とともに新教皇フランシスコが誕生した。この名から映画「ブラザーサン・シスタームーン」でアシジのフランシスコがローマに出向いて176代教皇イノセント3世に修道会の認可を願い出たシーンを思い出した。1209年頃のことだ。一切の私有財産を持たず労働と托鉢によって生活の糧を得る徹底した清貧を目指していた。謁見は聖堂だったか高い所に聖座があり、彼は仲間とずっと離れた入口付近にひざまずいて控えていた▼今度の266代の新しい教皇様はこのフランシスコの精神で世界を導いていこうとしている。フランシスコの目指したものは800年経って高い祭壇まで届いたというべきか▼「貧しい人に福音を告げ知らせるために、主が私に油を注がれた」と言われるみ言葉はこれからの教会のモットーとなるのだろうか▼私たちの信仰は復活という恵みから始まった。評論家の山崎正和氏は「大震災の復興は15年で完成すると確信している」と言ったが、復興とは損なわれた生活基盤を立て直すことだが、私たちにとっての大震災の取り組みとは「復活の恵み」という「よろこび」の体験を原点にすえて生き方をリセットすることでなければならない、と思う。なぜなら私たちにとってどんなにつらい体験も良きことを導き出してくださる神様のプランなのだと確信しているので。（守）

教区研修会・地区割を考える
宣教司牧評議会定例会

3月20日（水・春分の日）、仙台教区センター会議室で開催された宣教司牧評議会では、毎年各県ごとに開催している「教区研修会」の反省と、今後の方向性について、さらに、昨年度、平賀司教から提案された「地区割」について協議した。

①「教区研修会」について、昨年度は『典礼』をテーマに、森田直樹師を講師に迎えて行われたが、分かりやすく、密度の濃い研修で、参加者も例年に比べ多かったことなどが報告された。

今後は、「ミサとは、典礼とは」のテーマのもと、13年度は、「オルガニストの養成」、14年度は「集会祭儀 朗読者の養成」、15年度は、「教会の典礼における信徒の役割、特に葬儀における信徒の司式（納棺・通夜など）について」を予定している。

13年度の研修である、オルガニストの養成はむずかしく、地域によって必要性が異なるなどの意見が出されたが、「典礼音楽（オルガニスト養成・聖歌の歌い方）」については、同一の講師に各会場で同じ研修を行うことが話しあわれた。また、集会祭儀の司式者や奉仕者の養成も必要性にせまられているので優先して欲しい、との声もあった。

14・15年度については、さらに役員会で検討することになった。

②「地区制」については、・核になる教会の役割が明確でない。・集会祭儀が出来るよう準備を急ぎたい。・幼稚園のある教会には司祭の常駐が望ましい。などの意見が出され、自由討議では、・県境を越えた地区の教会と県連絡協議会との関係を見直す必要がある。・すべての条件が整ってからスタートしようとしても無理があるので、必要に応じて工夫しながら進めていくことが大切。・司祭の話し合い、司祭が協力して進めていくことが肝要。・地理的な線引きではなく、互いの協力、交流や関わりがうまくいくように考えてほしい。・地区制については、何年かごとに見直す必要がある。などの意見が出された。

最後に、司教から「具体的なイメージはまだまとまってはいない。『今ある』小教区同士がつながりを持つことを意識していく中で進めていきたい。あと2回の定例会で具体的な提案をしてほしい。仙台教区が『ここにある』という姿をまとめていきたい」との発言があった。

司祭異動第2次（前任地）
板垣 勤 郡山・二本松（会津地区）
舟山 亨 会津地区（遠野）
ニコラウス・コンディ 遠野（花巻）

「世界召命祈願の日」にあたって

司教　平賀徹夫

復活節第4主日は「世界召命祈願の日」。父である神に、ご自分の教会のための働き手を送り続けてくださるよう、世界中で祈り求める日。今年は4月21日で、この日のための教皇メッセージ全文が同日付のカトリック新聞に掲載されていたので、多くの方が読まれただろうと思います。テーマは「召命、それは信仰に根ざした希望のしるし」。聖書に語られている救いの歴史全体を根拠に、「神は決してご自分の民を見捨てないという確信、また神は司祭職と奉献生活という特別の召命を呼び起こして世の希望のしるしとすることによってご自分の民を支えてくださるという確信」をたえず新たにしようとの呼びかけでした。

仙台教区には現在、神学生は一人です。もっと増えてくれたら良い、と切に願っています。「司祭召命を求める祈り」を個人でも祈り、また、主日のミサのときにも共同で祈っている小教区やグループもあるでしょう。どうか倍旧に心を込めてお祈りしてください。あまり祈っていないなぁ、と思う人や教会には、祈ってくださるように、あらためてお願いします。上記メッセージには「深く絶え間ない祈りは、キリスト教共同体の信仰に成長をもたらします」との励ましもあります。召命のための祈りを深めることで信仰の成長を期したいと思います。

「元食（げんしょく）男子の会」という名前を聞いたことがあるでしょうか？　仙台教区の召命担当司祭チームが通例、年に夏と冬の2回、小学６年生から30歳までの独身男子を対象に、仙台教区内のあちこちでの楽しい“合宿”を企画しています。

この後、その呼びかけがあったら、ご本人でも、ご家庭でも、小教区からでも、ふるって参加していただけたら嬉しいです。

追悼～感謝を込めて～
パウロ藤井泰定神父

東京教区から仙台教区に派遣され、仙台中央地区担当司祭として働かれた師は、2月21日(木)午後2時24分、非閉塞性腸管梗塞のために帰天された。（75歳）

葬儀ミサは2月25日（月）、東京カテドラルにて、岡田武夫大司教司式で行われた。

仙台教区では、3月2日（土）、元寺小路教会で平賀徹夫司教司式で追悼ミサが行われた。

説教で渡邉師は、「藤井師は、昨年の復活祭後、東京教区から自ら志願して仙台に派遣され、わずか11か月だけとなったが、牧者として私たちを導いてくれた。司祭としての経験が長く、典礼を大切にし、キリストの教えを伝えることに喜びを持って取り組まれた」と、追悼と感謝の意を表した。

ホセ・モンロイ 花巻（盛岡地区）
梅津明生 司教館付（原町・郡山・二本松）

「第二バチカン公会議を、今日に生きる（Ⅱ）」

世界と共に歩む神の民

佐々木　博

(1)教会は旅する神の民

教会の自己理解の根本的改革に取り組み、聖職者中心主義のピラミッド型の教会像を、聖書的な教会のイメージに戻すべきという方向性を明確にした。

まず、教会を神秘的な実体（「教会の秘義」）として捉え、聖職位階制度は、神の民に仕える奉仕職であることを確認した。従って、神の民の全員がキリストの祭司職、王職、預言職にあずかっているので、まさに平等な尊厳と共同責任を担っている。

また、司教たちは、教皇のもとに司教団を構成し、全教会のための共同責任を担っている。さらに、司教は、使徒の後継者として自分に委ねられた地方教会を、統治し、司牧し、教え導くのである。

一方、信徒は、生活と社会における働きをミサで御父に献げることによって共通祭司職にあずかるのである。

また信徒は、生き方のあかしと言葉によって、福音を伝える預言職を生き、さらに、愛の実践によって王職の責務を果たすのである。

教会の改革と刷新の姿を『教会憲章』として、第三会期の終わりに公布した。

(2)現代世界の牧者である教会

教会の現代世界に対する責任について、第一会期の終わりになって初めてその草案の必要性に気づいたのである。つまり、『現代世界憲章』の芽生えである。すなわち、教会の世界に対する司牧的責任を自覚したのである。

第四回会期の最後に、この憲章を公布することができた。その冒頭で、次のように教会の切なる思いを訴えている。

「現代人の喜びと希望、悲しみと苦しみ、特に、貧しい人々とすべて苦しんでいる人々のものは、キリストの弟子たちの喜びと希望、悲しみと苦しみでもある。真に人間的な事がらで、キリストの弟子たちの心に反響を呼び起こさないものは一つもない。それは、彼らの共同体が人間によって構成されているからである。彼らはキリストにおいて集まり、父の国への旅において聖霊に導かれ、すべての人に伝えなければならない救いのメッセージを受けている」

この憲章が、特に東日本大震災と福島第一原発事故を体験した仙台教区が、被災地の救援に全世界の教会と共に参加する実践を生み出したのではなかろうか。

神学生だより

仙台教区神学生
佐藤　彰洋

主の御復活おめでとうございます。

今年は聖週間を仙台で過ごしまして、たくさんの信徒の皆様と関わることができたことを感謝いたします。仙台教区の神学生となり今年で4年目になりまして、3月27日の聖香油ミサの中で朗読奉仕の選任をいただきました。朗読奉仕の選任を受け、ミサで第一朗読、答唱詩編、共同祈願の意向が唱えられるようになり、学年をステップアップすることでようやくミサの中でできることが増えてまいりました。仙台教区の信徒の皆様方と一緒にミサをお手伝いできることが増えるのはとても嬉しいことです。これからも、信徒の皆様方と共に歩んでいけるようお祈りをお願いいたします。

さて、今回の春休暇では仙台の特別養護老人ホーム「暁星園」で奉仕させていただきました。今まで老人ホームに行ったことはなく、自分に特別介護できる経験もないので何ができるのだろうかと悩みました。しかし、お年寄りと関わっていくうちにお年寄りの寛容さに驚き、自分が何かをするのが押し付けになってしまい、そうではなくお年寄りの側にいてお話を伺っていくことの大事さを学びました。何かをするのではなく、ただ側にいるだけで人は安心を得られることを知ったことは、これからの学びにおいて大きなものです。今年の春休暇は信徒の皆様やお年寄りとの交流をたくさんさせていただきました。信徒の皆様からいただいた応援、お年寄りからいただいたこの経験を大事にし、これからも司祭への召命の道を進んでいきたいと思います。

皆様の支えがあってこそ私は頑張れますので、どうぞお祈りをお願いいたします。また、仙台教区に新しく召命を考える方が出ることも合わせてお祈りください。

信仰年、一信徒としての問いかけ ③

青森本町教会　佐井　総夫

―信徒一人ひとりの使命である信徒使徒職―

第二バチカン公会議以降、聖職者以外の信徒の使徒職が明確に宣言されました。このことにより私たち信徒は重荷を負ったのかも知れませんが、私たちの主キリストが言われたとおり、「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、私に従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである」（マルコ8・34～35）とあるように、私たち信徒は真に福音のために、主キリストに従う者として派遣された者となったのではないでしょうか。

この度、教皇ベネディクト十六様が退位されましたが、以下のようなメッセージを私たち信徒に発しています。「キリスト者は自分の信仰を生きるために『時流』に逆らうことを恐れてはなりません。『人に合わせること』への誘惑に抵抗しなければなりません。（後略）」と。神を信じ福音を宣べ伝えるとは、時には苦しい選択を強いられるものではないでしょうか。人、一人の力は微弱なものです。だからこそ、私たち信徒は互いに霊的交わりを深め、主イエス・キリストのもとに一致して強固な信仰共同体を作り上げる努力をしていかなければならないと思います。信仰年にあたり、そして東日本大震災が問いかける回心の時のしるしを、仙台教区一人ひとりの信徒の心に刻み、共に主の道を歩んでまいりましょう。

仙台教区滞日外国人支援センター

当センターは、東日本大震災で被害を受けた滞日外国人の方々に必要な生活支援を行うため、被災地にある教会やベースなどとの協力し、共に歩むことによって、適切な復興に向かっていけるよう支援し、海外からきた兄弟姉妹が日本社会の中で暮らしやすい環境をつくることができるように活動しています。

外国語ミサは、外国人の多い仙台、盛岡、八戸、福島、郡山、いわきでは以前からあり、現在、仙台教区滞日外国人支援センターでは2人の司祭が岩手（大船渡、北上、水沢、一関、釜石）・宮城（気仙沼、南三陸、米川、石巻、亘理）・青森（大湊、五戸、十和田、弘前、八戸）・福島（白河、須賀川、野田町）の各教会へ月に1回、手分けしてタガログ語あるいはインターナショナルミサをするために行っています。

しかし、今後の外国人司牧の継続性を考えていくと、移動距離もさることながら、やはり各地区の司祭の協力を得ながら、日本人信徒と共にミサを行っていく必要があるのではないかということに気付きました。

今の問題は、月に1度のミサに外国人の親が参加していても子供は日本語でないと理解できず、また、幼児洗礼を受けていたとしても、ミサにあずからず、遊んでいることがほとんどです。また、日本語ミサの理解が難しい外国人の親がミサに参加しなければ、子供も参加しません。

今後、各地区の司祭と連携して、少しずつ日本語ミサの中にいろいろ取り込んでやっていくなど、小教区と一緒にやっていくことができれば、そこの信者さんとのつながりもでき、共同体としてより強いものになると思います。生活習慣の違いなどから細かい問題はたくさん出てくると思いますが、まずはゆっくりと時間をかけて日本人信徒と外国人信徒が歩み寄る必要があるのではないでしょうか。

子どもたちのカテケージス

今まで教会に行けず、クリスマスやイースターのたびにカテドラルまで行っていた外国人信徒の方々も、地元の教会につながることができれば、わざわざ遠くまで行かなくても済みます。外国人信徒の中には運転免許を持っていない方もたくさんおられ、日本人の家族に休みの日に遠くの教会まで送ってもらう方もおられるそうです。

大船渡教会では震災後、フィリピンのお母さんたちが教会に来てくれるようになり、信者数は倍増、少しずつ教会の行事にも一緒に参加しています。日本語ミサでタガログ語の主の祈りを歌い、日本人信徒と外国人信徒の歩み寄りが見られます。お母さんに連れられてくる小さな子どもも日本語の讃美歌だけでなく母親の母語のタガログ語で主の祈りを歌っていたり、ミサ中、司祭が話す言葉を真似して言ってみたりする様子を見ると未来は明るい！と感じます。

今後、日本人の高齢化が進む中で、日本の教会内も小さな子どもさんがいる外国人信徒と共に歩んでいくことは、これからの教会にとって大きな力になることは確かです。

（支援センタースタッフ 林 愛子）

就任司祭の自己紹介

はじめまして。私はイグナシウス・クリスティアヌス・バーサ神父です。インセン神父と呼んでください。インドネシアから参りました。神言会の司祭です。

1979年10月8日インドネシアのフロレス島で生まれました。2009年10月18日フロレスで叙階されました。

2010年4月6日日本に来ました。名古屋の南山大学で、2年間ぐらい日本語を勉強し、去年の5月に長崎のルドビコ小神学校に指導司祭補佐として派遣されました。そこで神学生と生活しながら、色々なことを学ぶことが出来ました。長崎で車の運転免許を取りました。

今年の4月から仙台教区の四ッ家教会で働くことになりました。これから、お世話になります。よろしくお願いいたします。

私は、ニコラウス・コンディと言います。ニコ神父と呼んでください。インドネシアのフロレス出身です。2004年7月10日に神言会の神学生として来日しました。2004～2006年南山大学で日本語を学び、2006年～2009年同大学で神学を勉強しました。2009年10月10日に名古屋南山教会にて司祭に叙階されました。叙階後、2010年4月1日～2013年3月31日、南山教会の助任司祭として任命されました。当教会で青年会担当司祭、レジオ・マリエの指導司祭、日曜学校の担当司祭、中高生担当司祭を務めました。

2013年4月から仙台教区に派遣され、遠野教会で司牧させていただきます。一人でも多くの人々が福音の喜びを味わうことができるように努めていきたいと思います。これからもよろしくお願いします。

司教日程　5月・6月

5・1㊌ 部落差別人権委
狭山事件真相を探る
8㊌ 社会司教委員会
14㊋ 司祭評定例会・司祭団・役
15～17 修道会司教会管区長協議会
19㊐ 聖霊降臨の主日（元寺小路）
20㊊ 部キ連30周年（大阪）
22～23 部落差別人権委
狭山事件市民集会
24㊎ 全ベース会議
仙台サポート会議
26㊐ いわき教会
27㊊ 教区司祭団月例会
29㊌ 部落差別人権委・定例会
30㊍ 人権を考える委員会
6・6㊍ NPO法人「カリタス釜石」
7㊎ 全国朝祷会（松島）
8㊏ ロゴス点字図書館（ニコラ・パレ）
10～14 定例司教総会
17㊊ 福島会議
18㊋ 司祭評・役・教区司祭団・役
21㊎ 教区財政問題評議会
22㊏ 仙台教区修女連
24㊊ 司祭団月例会・責任役員会
25～27 復興支援全国担当者会議（郡山）
29㊏ 藤の園落成式（一関）

仙台教区「新しい創造」…２年目の３．１１

〈希望を織っています〉
カトリック弘前教会

四旬節第四主日、翌日にあの未曾有の東日本大震災から二年を迎えるという日、弘前教会のミサに集まった私たちは、聖堂に入るや祭壇前の〝オブジェ〟に目と心を奪われました=写真=。木の椅子やパイプ椅子、汚れた軍手、紙片、色褪せた竹筒、布袋、花瓶、木片の上には片方だけのサンダル…そこには被災地の光景が再現されていたのです。周りには無造作に立てられた木の棒にカリタスジャパンから送られてきた何枚ものポスターが掲げられていました。

主任司祭ジャン・ガブリ神父様のユニークなアイデアと豊かでデリケートなセンスに富む折々の飾りつけは、いつも典礼を美しいもの、そして私たちの信仰を培うものとなっていますが、この日、私たちの思いはまるで磁石のようにすぐさま被災された方々や亡くなった方々、ボランティアの方々に引きつけられて一つとなり、ミサ中捧げられた一つひとつの祈りには一層の真剣さが込められました。神父様の言葉にしたがって聖体拝領の後、私たちは足を止めてポスターを眺め、ポスターの中の人々、そしてその向こうにおられるすべての被災された人々を主と重ねて心に受けとめ、席に戻りました。しかし今回のポスターの人々は、皆すばらしい笑顔に輝き、私たちの方が希望と力をいただきました。もちろん弘前教会に表れた今回の〝オブジェ〟の中にも一枝のグリーンと灯された一本のローソクが置かれていたことを言い忘れてはなりません。

「我が神よ、なにゆえ我を見捨て給ひき。我が呻き、我が嘆き、なにゆえ御耳に届くことなかりき。助けを乞ひつつ御身に叫びて救はれざること絶えてなく、御身を頼うで見捨てられたるためしなし」（詩22ケセン語訳）十字架上で祈られたイエスとともに今なお苦しみの中にある多くの方々が復活へとこの時を過ぎ越すことができますよう、「私たちから離れることなく、喜びや悲しみを共にしてくださる」（東日本大震災被災者のための祈り）神に心から祈りつつ。（中井要子）

〈あの日から2年〉
カトリックいわき教会

東日本大震災から2年目を迎える3月11日、被災地に近い小名浜教会で、追悼ミサをおこないました。午後2時46分には教会の鐘を鳴らし黙祷。

ミサ後、三崎公園へ移動し、潮見台という高台で海に向かいロザリオ一連を唱え、花を手向けました。

いわき教会では昨年1月、有志により、ボランティアグループ「チーム平・堂根」を結成しました。津波被害に遭われたいわき市民の方々が多く在住されている内郷雇用促進住宅の集会室=写真=で、月2回サロンを開いています。おいしいお茶とお菓子とともに皆さんがおしゃべりを楽しむ、リラックスできる空間を提供しはや1年。サロンがいつの間にか皆さんの心のささえになってきたことが私たちの喜びと励みになっている今日この頃です。（菅野晶子）

〈被災者支援窓口として〉
カトリック四ツ家教会

震災直後は支援物資の調達、搬送をはじめ、沿岸教会の要望を情報収集し、それに応えるように努めてきました。

現在は、釜石の仮設住宅2～3カ所と、宮古のみなし仮設1カ所に定期的に通っています。

お茶っこサロン=写真=と言われる、お話や歌、絵手紙、手芸、包丁砥ぎ、マッサージなど、その時々に協力していただける方の特技を生かした活動をしています。20人前後の昼食を準備して行き、一緒にいただきます。

「また来ていただけるんでしょう？」と待たれる反面、「おかげで自分たちで自立できるようになったから、あまり無理しないで！」と、うれしい言葉も聞かれるようになりました。

また、宮古教会の「分かち合いマーケット」のお手伝いにも行っています。

最近では、宮古で活躍しておられる札幌教区から、ボランティアの協力要請が来ております。

月日がたつとボランティアに応募する方も少なくなり、青森・岩手の教会からも手伝ってほしいと要請されています。遠く北海道から、1週間から10日間ボランティアに来られている方々もおられます。地元岩手からお手伝いしないではおられません。

被災者は今後、仮設住宅から復興住宅へと移ります。被災者の心の動きは微妙です。それぞれの事情により、悩みも異なります。これからが本当の意味での寄り添い、傾聴が始まるのではないかと思っております。（中村美栄子）

就任司祭の自己紹介

中 重広（あたりしげひろ）那覇教区司祭

今回は、司牧支援ということで仙台教区（宮古教会）に寄せていただいております。支援に来たのか、されに来たのかわからないくらい、皆様からたくさんの励ましをいただいております。ここ、東北地方の風も水も冷たいですが、とてもおいしいです。久しぶりに〝みぞれ〟も体験しました。これから私たち司牧支援司祭団として奉仕させていただきますので、よろしくお願いいたします。

〈略歴〉

1970年11月28日 フィリピンのマニラで叙階。叙階後、那覇教区の7小教区で司牧。

主の復活と共に受洗の喜び

気づかされ、目覚めさせられる洗礼

阿部 安希子 女・20代
洗礼名 ディアヌ・サンチャ・ヴァレンティーノ（東仙台教会）

いつかカトリックで、洗礼を受ける。私がその思いを抱いたのは10年以上も前のことです。なぜこの2013年でなければならなかったのか、それはただ、その時が来たからとしか言いようがありません。断固たる思いを胸に勉強会へ向かった訳でもなく、ふらりとおもむいた先で、私はイエスを通して気づかされ、自ら目覚めることによってすべてが今、この時でなければならなかったことを身をもって体験しました。

「見なければ信じることは出来ない」と言ったトマスのような、頭だけで理解しようとしていた態度をどこかに持ち続けていた私に、両手の傷跡をトマスが見たように私も神の奇跡を多く体験することによって、目覚めと共に新たな命を与えられた、ということに尽きます。この一連の神の奇跡は、洗礼の勉強会に参加したその時から始まり、一人の人間の出会いと死を通して変容を繰り返し、3月30日の復活徹夜祭の祭儀で再び新たな始まりを迎えたのです。

幸福な洗礼

千葉 完枝（さだえ）女・80代
洗礼名 マリア（元寺小路教会）

この度の復活祭に洗礼を受けさせていただき誠に幸福なことでございます。約1年間のお勉強会に出席させていただき、何もわからない年寄りをここまで導いて下さった長谷川シスター様のとても楽しい講義につられて参りました。このことは私にとってとても幸福なことでありました。また、ご一緒にお勉強なされた方々には、とても励まされて、足腰の衰えた私がこうして幸福な洗礼を受けられまして、主なる神様に心より感謝申し上げ、さらに、朝夕欠かさず心よりお祈り申し上げたいと願っております。いろいろとお世話いただいた多くの皆様方、ありがとうございました。

受洗によせて

城田 美智子 女・70代
洗礼名 コルカタのマザーテレサ（元寺小路教会）

私の母方の祖母は敬虔なクリスチャンでした。それに伴い親戚縁者にクリスチャンが多く、そんな環境のもとにいた私の中では、いつも宗教はカトリックであるとの思いは常にあり、叔母にもよく「教会に行きなさい」と言われつつ、そのうちにと時を経た。最近、兄を亡くし、何か背中を押されるように入門講座を受けました。いつしか、ふと「愛」について考えさせられることがあります。「愛」、それはその人の立場を理解すること（そこに自分の感情は入れない）、むずかしい事ですが、人は寄り添うことで暖かみを感じます。「暖かみ」、それが伝わった瞬間、お互い何かを覚える。寄り添うことにより、どんな人にも暖かみがあると感じる。でも、知らない人にはつい距離を置いてしまいがちですが、ぜひ「隣人を愛せよ」を実践したいと日々心にとめております。このようなことを考えるのも、入門講座のおかげです。

「信仰とは90％の疑いと10％の希望」

佐々木茂博（しげひろ）男・50代
洗礼名 ヨハネ（四ツ家教会）

妻が信者だった。2人の息子たちも幼児洗礼を受けた。いずれは自分もという気持ちはあった。仕事や家族に恵まれた20年。教会から足が遠のいていた。会社を辞めて独立。事業の失敗。岩手県釜石市で東日本大震災を経験した。多くの人の命が奪われた。なぜ、自分は助かったのだろうか。教会で中学時代の恩師だった大沢俊成（おおさわとしなり）先生と再会した。1年ほどミサに通い背中を押してもらった。でも、自分が受けてもいいものなのか？　神の存在に確信はなかった。そんな時に「信仰とは90パーセントの疑いと10パーセントの希望だ」という言葉に出合った。

何となく吹っ切れた。今は神を意識しながら90パーセントの疑いを少しでも減らしていきたいと思っている。

ぶどうの木の枝

山本 美鈴 女・50代
洗礼名 パウラー（いわき教会）

去年の8月に主人は神様のもとへ逝きました。洗礼名はパウロです。私もパウラーの洗礼名をいただきました。

神父様にお世話になり、長男の結婚式、主人の病院儀式（病者の塗油）と、様々な難関を乗り越えることが出来ました。

主人の母の勧めで洗礼を受けることが出来ました。少しでも主人に近づけたらと望んでいます。神様の恵みで、私と一緒に孫も幼児洗礼を受け、喜びをたくさんいただき感謝です。毎日の祈り、ごミサのうちに学び成長していきたいと思います。そして、主人と共々一つのぶどうの木に結ばれていきます。

支えの中で

岩井 良生（りょう）男・10代
洗礼名 ミカエル（元寺小路教会）

元寺小路教会を訪れたのは6年前、父の転勤で、さいたまから仙台へ来た

「経済即神」より根源的なもの

スピノザの考えた唯一の実体「自然即神」は、現在において経済になってしまったのでしょうか。経済の外側には倫理も道徳も、一切の指導原理は存在しない。戦争も、政治も、教育も、震災の復興も、すべては唯一の実体なる経済の無限の様態としての表現にしかすぎない。そこに目的はなく、衝動に突き動かされるように、すべては自動機械のように動いていく。アメリカと中国との覇権争いに、アメリカ経済で大きな役割を担う軍需産業に、日本は今後、巻き込まれていくのでしょうか。10年前の2003年、アメリカはイラクに侵攻しましたが、当時の日本の政権はいち早くそれに賛成しました。この侵攻には、アメリカの産業界、特に石油業界が絡んでいました。そして、アメリカに追従していくという政策には、日本経済の問題も絡んでいました。その結果、イラクはカオスそのものになり、テロリストを育てるための温床となってしまい、その状況は、現在も続いています。今、経済を超えたもっと根源的なところで、自然そして神を考えていくことができるのかが問われています。

地球を大事にする会　原田雅樹（ドミニコ会司祭）

時のことです。両親の結婚式を挙げてくださったホアン神父様と初めてご挨拶をしました。その後、入れ替わりで派遣されたホセ神父様に受洗のお願いをしました。しかし、学校の部活などで、教会へ通うことができずにいました。そして、東日本大震災が起こり、忙しい中、ホセ神父様は僕のために時間を作ってくださいました。勉強会を開き、中高生会の行事にも呼んでくださいました。

受洗を決めてから3年かかりましたが、昔は求道期は3年だったと渡辺神父様から聞きました。

洗礼式では、この期間に知り合った皆様から多くの祝福をいただき、神様は僕にあった期間を準備して下さったと思いました。皆さまから学んだことを糧に、光の子として進んでいきたいと思います。

ありがとう

岩井 彩実（あみ） 女・10代
洗礼名 クララ・マリア
（元寺小路教会）

初めて「洗礼」という言葉を聞いたのは幼稚園の時でした。「あみちゃんはまだ洗礼を受けていないの？」と仙台白百合の大場光子先生がおっしゃいました。そして、さいたまから引越してきた私を日曜学校に誘ってくださいました。

小学校に進んでからは、今は北海道にいらっしゃる中村淳子マ・スールがわたしの洗礼を楽しみにしていらっしゃいました。

洗礼式では、天国にいらっしゃる大場先生の笑顔が浮かびました。ベールをかけていただいたときは、「やっと神様の子になれた」と思いました。そして、ご聖体を受けた時、イエス様が「おめでとう。良かったね」と言ってくださっていると思いました。

見守ってくださった日曜学校の皆さん、神父様、教会の皆さん、ありがとうございました。

これから一緒に教会を守る人になりたいです。

教会との出会い

大木 基（もとい） 男・70代
洗礼名 ヨゼフ （北仙台教会）

カトリック北仙台教会との出会いは、10年ほど前、家内の母がカトリック信者ではありませんでしたが、ラトール神父様により葬儀が執り行われたのがきっかけでした。その後、実兄が体調を崩し、緊急の洗礼を受けたのを機会に、昨年の3月より、神父様の指導により聖書の勉強を続けております。

私は現在、災害復旧の工事に関わっているため、教会のミサにも毎週出ることができませんし、いろいろ勉強不足ではありますが、今年、まだ早いとは思っておりましたが、洗礼式に出席を許されました。共同体の皆様には、これから折に触れ信徒として教会にどのような活動をしてゆけばよいかなど、いろいろアドバイスやご指導をお願いしたいと思っております。

新鮮な喜び

山崎 美智子 女・50代
洗礼名 マリア・テレジア
（東仙台教会）

私が教会に通うことになったのは、私の無知からオタワ愛徳修道女会を訪ねたことから始まりました。教会に行くことを勧めていただき、はじめてミサにあずかった時は、新鮮な喜びを感じたことを覚えています。

東日本大震災被災者への祈りや支援、自分の病気のことなど…神様の愛に気付き、受洗へと導いていただきました。

復活徹夜祭洗礼式の神様からの祝福と恵み、また、教会の皆様からの祝福と祈りは、晴れがましく、想像を超える感動をいただきました。感謝と共に、これからはいつも主が共にいてくださることを忘れずに歩んで行きたいと思います。

私にとっての洗礼

藤倉 暢子（ようこ） 女・10代
洗礼名 マリア・エリザベト
（元寺小路教会）

私が洗礼を受けてみたいと思ったのは、小学校低学年の時。姉が洗礼を受けたことがきっかけでした。姉が白百合学園に入学し、宗教について学んでいる様子、また、父と一緒に祖父の骨をおさめている教会に行き、祖父についての話を聞いているうちに、洗礼を受けている人たちは、なんて広い心を持っているのだろうと思いました。そのような方々のように、いつか私もなれたらいいなと思い、洗礼を受けました。

洗礼を受けたことで、「互いに助け合う精神」「共に喜び、共に泣く精神」を大切にしていこうという気持ちが強くなりました。「祈り」の時間も以前より大事にするようになりました。受洗前はただ唱えるだけだった祈りが、他人のために神様に「祈る」という祈りに変わりました。宗教の先生に「祈りは神様と対話できる時間」と教えていただきました。今後、自分はどうすべきか、今、自分に何が出来るのかを神様にお話しする大切な時間として過ごしています。

今、自分にできること、何をすべきかは、はっきりとは分かっていませんが、神様が、私の持っている何かをお望みでしたら、喜んで使っていただきたいと思っています。誰が、いつ、どこで神様に出会うか分かりませんが、今まで出会った人、これからの出会いを一つ一つ神様からのお恵みとして受け止めていきたいと思っています。

＜ＪＣＭＡ（日本カトリック医師会）仙台支部からの報告とお知らせ＞

JCMA 仙台支部では東日本大震災後のメンタルケアの一端としてJCMA本部から送られた救援基金を基に、神戸の精神科医小林和(こばやしかず)先生に定期的に東北地方においでいただき、津波被災地を中心として、「災害と心のケア」「災害と心の健康」と題した講演と個別相談を行ってきました。平成23年8月末から平成25年3月までに訪れた地域は延べ回数として、仙台市16回、気仙沼市13回、大船渡市8回、住田町2回、盛岡市1回、宮古市15回、大槌町2回でした。このように継続できたことは小林先生の熱意はもちろんですが、現地の方々のご理解とご協力があったからこそです。ご協力くださった方々に心から感謝申し上げます。

訪問活動は平成25年3月末で一区切りとしましたが、支援者の方々を対象とした電話相談‘支援者ストレスほっとライン’は12月27日まで継続しています。4月1日からは火・金の週2日で**12：00〜20：00**まで、**フリーダイヤル0120-596-373**です。

復興までの道のりは長いです。悩んだり困ったりして自分では動きが取れなくなってしまった、心のカゼ症状がずっと続いている、どう対応していいかわからない方が身近にいる、などありましたら、ぜひほっとラインをご活用ください。　（JCMA 仙台支部 溝口由美子）

小田武彦神父講演会

仙台ロゴス研究所

3月3日(日)午後、北仙台教会で、大阪教区の小田武彦神父＝写真＝を招いて、仙台ロゴス研究所主催の第19回公開講演会が行われた。前2回の公開講演会では仙台教区75周年にちなみ、池田まり氏の講話で第二バチカン公会議以前の仙台教区の歩みを振り返ったが、今回は信仰年、第二バチカン公会議50周年にあたって、「第二バチカン公会議からの呼びかけ～日本の教会の歩みと課題」という演題でのお話を小田師からうかがった。小田神父は大阪教区司祭。NICE2では事務局長を務め、元トマス大学学長の要職にもあった。現在は聖マリアンナ医科大学特任教授・宗教主事として活躍しておられる。仙台で講演をされるのは久しぶりであった。講演では第二バチカン公会議の開始から会期中のエピソードを交えて公会議を振り返り、教会とは何か、宣教とは何かということを、身近な例をあげながらお話をされた。後半ではキリスト教伝来以来の日本における宣教の歴史も概観し、東日本大震災後に連携を進める日本の教会の新たな可能性についても示唆された。「神のみ業に信頼して福音を宣べ伝えよう」というエネルギッシュな小田神父のお話に、会場の信徒館ロゴスは熱気に包まれ、講演後の質疑応答も活発に行われた。第二バチカン公会議公文書の翻訳改訂版もまもなく出版されるという話題もあり、第二バチカン公会議の精神に基づく信仰刷新の息吹が再び高まる予感を共有することができた意義深い講演会となった。

（北仙台教会 土倉 相）

【ロゴス研究所】故佐藤司教が1971年に北仙台教会の地に設立、ロゴス（ことば）とディアロゴス（対話）を基本理念とし、小教区を超えた活動を開始した。しばらく休止していたが、2003年に再開し10年目を迎えた。活動方針は、(1)信徒の養成、研修、研究活動、(2)地域社会活動、(3)図書の整備と貸出。現在、定期的な活動として、ロゴス公開講演会、ロゴス講座、宗教教師の勉強会、地球を大事にする会など。「時のしるし」を見極めつつ活動している。

「カトリック学校宣言」

～カトリック学校がカトリック学校であり続けるための学校マネジメント～

―福音共同体をめざすカトリック学校の実現のために―

著　者：佐井 総夫

主な内容：「カトリック学校宣言」それは、教育活動をとおして「福音」を宣べ伝えるという、カトリック学校本来の使命を果たしていこうとの提言、そして、すべてのカトリック学校関係者への問いかけである。カトリック学校に奉職するすべての教職員とそれをめざす学生のために書いた手引き書。

「カトリック学校宣言」をする学校こそが、カトリック学校としての使命である「福音宣教」を果たしていける。カトリック学校は、カトリック学校であることを宣言し、「福音宣教」という使命を果たすからこそ、カトリック学校となり得るのである。

「信仰年」にあたり、私たちカトリック学校は、真にカトリック学校であり続けるために、「福音宣教」という使命に今一度、原点回帰しなければならない。

価格：¥1,500（税抜き）

販売店：全国キリスト教関連書店

お近くにキリスト教関連書店がない場合には、メールにて佐井総夫までお問い合わせ下さい。

benemicsai@hb.tpl.jp

〈告知板〉

＊春の後藤寿庵祭

日時　5月26日(日)　10時～

場所　寿庵廟

（岩手県奥州市水沢区西田）

雨天時は水沢教会（水沢区川端）

駐車場　胆沢平野土地改良区

参加は教会ごとにまとめて5月19日まで。個人参加も歓迎

お弁当　500円（お茶付）

申込先　水沢教会

（TEL・Fax 0197-25-7707）

司祭 高橋 昌

携帯（090-4551-8454）

＊松浦悟郎司教が語る

「憲法9条を世界の宝に」

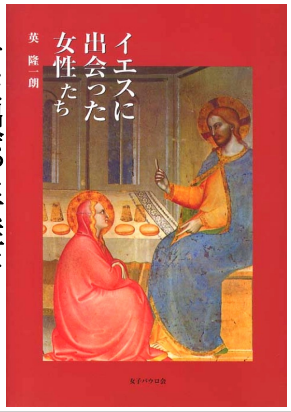
日時　6月2日(日)

9時30分ミサとミサ後

会場 カトリック元寺小路教会

主催 カトリック正義と平和協

新刊案内



イエスに出会った女性たち

著者　英 隆一朗／発行　女子パウロ会／定価　1100円＋税

福音書のなかに、イエスに出会った女性たちが、大勢描かれています。聖母マリアや、マリアとマルタ姉妹など、名前が分かっている人物がいます。しかし、ペトロの姑としか書かれず、名前がわかっていない人も大勢います。

本書は、15章にわかれており、その1章ずつに1人の女性の姿が浮き彫りにされています。その一人ひとりは、各章に付けられているサブタイトルの切り口で取り上げられています。この15章の中には、聖母マリアが3回取り上げられています。

まず第1章に神の母・聖マリア―決断した者の強さが描かれ、7章には、ご訪問のマリア―救いのビジョンを生きる。そして、14章は、死刑囚の母・聖マリア―十字架の下に立つ聖母、となっています。その他、出血症の女、姦通罪を犯した女性、カナンの女などが取り上げられています。

本書は、月刊誌「あけぼの」に連載され、好評だったものを著者が加筆したものです。ある読者は、「はじめてマルタのことで、納得いく説明を読みました」と言いましたが、女性への温かいイエスのまなざしを感じさせる書物です。